

第三章 溝の帯Ⅱ

1

暑い。空が青い。青すぎて落ち着かない。

視界いっぱいに広がる青。そこに突然黒いものが侵入してきた。何だろうと思っていると、いきなり頬を打たれた。ぼくは鋭い痛みを感じ、もんどり打って倒れた。同時にゾツとするような遠吠えが耳をつんざいた。

何だよいたい！ それでなくても今日はヤなことばかり続いてるっていうのに！ いらだたしい気持ちが体の底からわき上がってくる。ぼくは頬を押さえながら相手を睨みつけた。

猿——。また猿だ。

そいつは、あ然としているぼくに対して、しゃにむに乗っかかってきた。イテツ。噛みつかれたぞ。ぼくは仰向けに転んだまま、つかんだ相手を右足で思いっきり蹴り上げた。巴投げだ。

ギャツ。そいつは見事に宙を飛んで、斜面をごろごろと転がり落ちていった。…やったぞ。どうだ、小学生だからってバカにするんじゃないぞ。逆上がりはできないけど。本ばかり読んでないで表で遊びなさいって叱られたりするけど…。

呼吸が落ち着いてきたら、急に周囲の音が聞こえだした。ギヤギヤッ。キキーツ。

ぐるりを見回した。あちこちで何十匹という猿たちが争っている。相手を組み敷いたり、木の上と下で吠え合っていたり、中には噛まれたのか、ひどく血を流しているものもある。まるで戦争だ。

いやこれは本当の戦争なんだ。毛並みがそれを物語っている。一方が濃い茶褐色の猿たち、対するのがベージュの猿たち。違う種族間の戦いなんだ！　ぼくは戦場のど真ん中にいるんだ！

待てよ。左手を挙げてみた。ぼくの手の手甲から腕にかけてびっしり生えているのはベージュの毛だ。そうだ、ぼくはベージュの種族だった。すっかり忘れていた。何が小学生だ。ん？

別の猿が腰に飛びついてきた。ぼくは右足をしっかりと踏ん張ると、払い腰で投げ飛ばした。どうだ、柔道だぞ。日本人を甘く見るんじゃない。ほかに二三匹、隙をうかがってるのがいたが、にらみつけると、すくんでしまったようだ。

そのとき、崖っぷちの一群が目に入った。茶褐色の猿たちの輪の中に、おびえたベージュ猿が見える。その足下には血まみれの老いた猿が倒れている。

ああ——あれは姉さんだ。倒れてるのは…父さん！

ぼくは近くにあつた太い枝を拾い上げ、茶褐色の猿たちの中へと駆け込んでいった。こちらに敵猿の注意が向くよう、大声を上げながら。

2

「ウガアーッ」

雄叫びがぼくの喉からほとばしり出た。「どけどけー」と叫んだつもりだったんだけど。そりゃ獣だもの無理さ、という気持ちと、どうして？ という気持ちが頭の中でごっちゃになっていた。

父と姉を取り囲む茶褐色の連中がこちらに顔を向けた。その一匹めがけて、ぼくは跳躍した。ねらい違わず胸を蹴り飛ばされた猿は弾き飛んで、岩に頭をぶちあてて気を失った。着地したぼくは手に持つ棒を構え直した。ちようどバットのようにはごろな太さと重さだった。

“宮本武蔵”を思い出した。日本一有名な剣豪だ。先月、井沢先生に勧められて読んだ。今の状況は、一乗寺下り松で吉岡一門を相手にしたときの武蔵みたいだ。

そんなことを考えたのはほんの一瞬で、ぼくは棒を両手に持ってブンブンと振り回した。猿たちはおびえたように後ずさりした。その機に乗してぼくは手近にいた一番大きな猿に棒を振り下ろした。グアッ悲鳴を上げた

大猿は一撃を受けた肩を押さえてうずくまった。そして後ろも見ずに一目散に逃げ出したのだ。

親分が逃げたせいで、他の猿たちもクモの子を散らすように引き始めた。ある猿は山の斜面をかけ下り、ある猿は木に登って枝を伝いながら。

終わりはあつけなかった。戦場に残っているのはベージュの猿たちだけになった。

居残った彼らの疲れた顔がまぶしげにぼくを見上げている。

ぼくは彼らを見おろしている。

ようやく気づいた。ぼくは二本の足で立っていることに。目の前にいるどの猿も立ち上がってなんかいない。加えて、右手に握っている木の棒。これは道具だ。戦いの中で道具を使った猿などいなかった。

昨日借りてきて、読むでもなくながめていた本の中の文章を思い出した。

“人類は四足歩行から二足歩行へと移った”

“道具を使うことをおぼえた”

なんてことだ。それじゃ、ぼくが“きっかけ”になつてしまったのか！

目のくらむ思いがした。手から棒がはなれ、その場に座り込んだ。膝がへらへら笑ってる。この時代の体に二本足はかなりキツかったんだろう。

——すごいね。

ささやくような声がした。辺りを見回したが、ぼくの周囲に集まってきたベージュ猿たちの姿しかなかった。

3

父さん猿——ほかに適当な呼び方がない——は右腕を骨折していた。動かそうとすると胸を痛がるので肋骨が何本か折れてるのかもしれない。命に別状はなさそうなのが不幸中の幸いだ。周囲の猿たちの接し方をみていると、やはり父さん猿が一族のボスなんだろうということがわかる。何匹かが父さんを背負ったり支えたりして、棲み家まで連れていくことになったらしい。らしいというものは、彼らのしぐさというかボディ・ランゲージでなんとなくそう読みとれたのだ。全身傷だらけの姉さん猿をいたわりつつ、ぼくも付いていく。

——早くここを立ち去ったほうがいい。

また同じ声がした。今度はあわてなかったけれど、驚いた。声は頭の中から聞こえてくるんだ。まるでCDをヘッドフォンで聴いたとき、歌手の歌声が頭の真ん中で鳴ってるみたい。

——茶褐色の猿たちは執念深い。

三度^{みたび}、声は頭の中で鳴った。その瞬間にぼくは理解し

た。これはぼくの声なんだ。ぼくの脳が発している言葉なんだ。

周囲が山々に囲まれ、木々が生い茂り、砂埃が立ち上るこの場所が舞台、茶褐色の猿たちや、ぼくらベージュの猿たちが登場人物だとすれば、この物語には語られていない前書きがあるはずだ。いわば物語設定というやつだ。小説では1ページ目から出てくる人物にしても、それ以前の人生が当然ある。いや、あるように見せる。読ませる。つまりぼくに対しても同じわけで、この世界で生きていた分の知識や経験はあるはずなのだ。それを脳が声にして知らせているわけだ。

わずらわしいから、茶褐色の猿たちを『ブラウン族』、ぼくたちを『ベージュ族』と呼ぼう。

今日起こった戦争の理由もいまは分かる。この地はもととブラウン族だけが住んでいた。そこへ最近になってベージュ族が移り住んできた。どちらの種族も木の実が主食だ。ところが美味しい木の実のなる森の広さは限られている。

そう、これは命がけの領土争いなんだ。敗者は出ていくしかない。——でも事はそう単純じゃない。なぜなら……。

足の裏に揺れを感じた。地震が来る！

「ガウアウツ（みんな伏せろ！）」ぼくは反射的に叫ん

でいた。通じるのか？　　という思いが心をかすめたが、仲間たちは全員合わせたように地面にへばりついた。

やがて揺れが本格的になってきた。かなり大きい。以前、地割れを目の当たりにしたときの数倍だ。ぼくは恐怖を感じた。

4

ゴゴゴゴゴ。

揺れは大きな地鳴りと共にやってきた。

いくら地震国日本に生まれたぼくでも、こんな揺れは初めてだ。地面が震えるというより、踊ってる感じだ。怖い。とても怖い。怖すぎて笑えてくる。まるで冗談みたいだ。

振り返って仲間の猿——猿人と言わないと失礼か——たちを見た。みんな同じように揺られている。父さん猿を背負ってくれてる体格のいい猿人も、姉さん猿もぼくと同じく、ザルの中の砂粒状態だ。早く治まってくれ、と念じるしかない。

じっさいは一、二分だったろう。ようやく揺れが静かになってきた。地鳴りが遠のいていき、その分、騒いでいる鳥や獣たちの鳴き声のほうが大きく聞こえる。

ホッと胸をなでおろした、その時だ！

ガラガラガラ。

さっきのとは音程の違う地鳴りが足下から響いてきた。今度こそ本当に背筋が寒くなった。

ドシン。地面が激しく傾いた。ぼくも仲間たちも一気に滑り落ちていった。体のあちこちが擦^すりむけるが、頭を庇^{かば}うのがせいっぱいだ。もういいかげんにしてくれ！

ドドドドド、ズシンンンン。

低い地響きが空気を揺るがし、今度こそ本当に静かになった。ぼくはしがみついていた太い木を支えにして立ち上がった。

風景がガラリと変わっていた。ぼくたちがいる辺りは、まるで台風に晒^{さら}された屋根瓦のように、でこぼこだった。地割れの数も大きさも前回の比じゃない。心臓の弱い人ならこの風景を見ただけで卒倒するだろう。

驚いたのはそれだけじゃない。山の一部がごっそり剥^はげ落ちている。それだけでドーム球場1個分はあるだろう岩の塊^{かたまり}が、猿人たちの戦場だった場所をまるごと押し潰^{つぶ}していたのだ。

危なかった。あと30分遅ければ――。

そしてもうひとつ重要なことに思い至った。あの大岩は争いの元になった美味しい実のなる森の一つを消してしまった。たび重なる地震は猿人たちの食糧事情をも悪

化させていたんだ。

事の真相を知ったぼくは、ともあれ、姉さん猿や仲間たちと力を合わせて、父さん猿を担ぎ、棲み家へと急いだ。

峠に差しかかると夕陽に照らされた山々が見下ろせた。あの『溝の帯』が、さらに深みを増し、ぼくたちの楽園に対して毒牙を伸ばしつつあるのは誰の目にも明らかだった。

5

傷ついた父さん猿——父と呼ぼう——に左肩を貸しながら、ぼくは足を止めて、溝の帯を眺めていた。巨大なパノラマだ。グランド・キャニオンに似てるけど、もつと生々しい。なまなま神様がむりやり谷を押し広げ、谷底を引つ張り出した——そんなふうに見える。しかもこの風景は最近大きく変わった。数日前ぼくが見たのとは、溝の幅も深さも段違いだ。地面が動いている。活発な地殻変動が地震をしよっちゅう引き起こしてるんだ。

手をそつと握られた。姉さん猿——いや姉だ。

——急ぎましょう。

言葉はなくとも感情が伝わってきた。父を反対側から支えている大男も、なぜ立ち止まる？ と不審そうな顔

でぼくを見つめている。ぼくたちは再び歩き始めた。

ベージュ族は山の斜面にある洞穴を棲み家すかにしていた。おのおの一家族がひとつの洞穴ほらあなを占めている。なかには窪み程度くぼの家もある。この辺りは地震の被害を受けなかったようだ。ぼくたちは背負った父ともども、一番高いところにある洞穴に入った。中には母とまだ幼い弟たちが数人いた。母は父の様子を見て驚いたようだが、立ち上がった穴の奥へと入っていった。ぼくたちは草を敷き詰めた寢床に父の体をゆつくりと横たわらせた。奥から戻ってきた母が手にしていたのは薬草らしい。母はそれを口の中でぐちゃぐちゃと噛み砕き、父の傷口に吐き出しては丁寧ていねいにこすった。

夕陽が山の陰に潜り込むと、照らすものは月だけ。洞穴の中はほとんど真っ暗だ。それでも森の木々がわずかに反射させる月の光で、かろうじて家族の動きが見えるんだから不思議だ。治療を終えた母は父のそばに座り込んだ。父の呼吸もだいぶ落ち着いたようだ。いっしょに父を運んでくれた大男はいつの間にか姿を消していた。ぼくは姉と並んで父を見つめていた。弟たちはわけもわからず隅っこで遊んでいる。

ぼくは居心地の良さを感じていた。なぜだろうか。暗いし狭いし、得体の知れないにおいさえする。なのにこの染みいるような暖かさ。やがて気づいた。家族なんだ。

これがアットホームのぬくもりというものなんだ。長い間忘れていた感触。

家ではいつも独りだった。仲のよい家族を町で見かけると顔をそむけた。TVをつけてもホームドラマではチャンネルを替え、観光地は家族連れで賑わってます、にはスイッチを消していた…。

肩に腕がまわされた。姉だった。ぼくは姉によりかかって泣いた。でも猿人の体ではうまく涙が出てこなかった。

6

泣きながら眠ってしまったらしい。目覚めると洞穴の入口には朝陽が差していた。

姉の姿は見えない。眠りに落ちる前、姉に膝枕してもらったことを思い出した。父の様子をうかがうと、すやすやと寝息を立てている。容態は安定してるようだ。母も弟たちといっしょに横になっている。

外へ出てみた。陽光はまぶしいけれど溝の帯がはつきりと見える。なんて雄大なんだ。世界遺産に登録もOKって感じた。

声がするので洞穴の下をのぞいてみると姉がいた。ふらふらしてる。驚いた。姉は二本の足で歩く練習をして

いた。昨日までは他の猿人たちのように四本足で歩いたのに。

そうか、ぼくの真似をしてるんだ。二本足で歩くことの便利さに気づいた姉は、自分もやってみよう。と。ぼくはうれしくなって、岩場を伝って姉のそばに降りていった。気づいて振り向いた姉にぼくは手を挙げて「おはよう」とあいさつした。もちろん言葉なんか出ない。「アア」という鳴き声程度だ。姉も真似して手を挙げる動作をした。うんいいぞ。猿人さんたちにはできるだけ良い影響を与えたいものだ、なんてね。

昨夜はこの姉がぼくを慰めてくれた。そのお礼を伝えたいと思ったけど、方法がない。照れくさくなってぼくは溝の帯に目をやった。

——あそこに興味があるのね。

ギクリとした。言葉じゃない。昨日と同じように頭の中へ直接聞こえてくる。

——あそこは聖なる地。決して足を踏み入れてはいけない場所。

ぼくも調子を合わせるように心の中で言葉を思い浮かべてみた。「わかってるよ。山のカタチが毎日変わるくらい危ないところだからね」

ずっと立ってるのはしんどだろう。姉をうながして岩の上に仲良く腰かけた。

——ちがう。そうじゃないの。

え？「ちがうって、どういうこと？」意外な返事に、姉の顔を振り返った。

——あなたは小さかったから覚えてないのね。

すっと姉は腰を上げた。

——付いてきてごらん。

姉はバツと地面を蹴^けった。と、みるみる斜面を上手に滑り降りていった。ぼくは言われるまま、付いていった。途中、倒れた木々の間をくぐり、形が変わってしまった湖からあふれる水でできた川を飛び越え、ひたすら進む。姉の向かう方向は、溝の帯の中心だった。

7

最初のうちは、自然の猛威にもてあそばれた大地の裂け目やひっくり返った大岩、わき出す温泉などに目を奪われて、物見遊山の気分だった。けれども徐々に道のりは険しくなり、見上げた空の面積も小さくなってきた。姉の足取りはゆるまない。ろくに振り返らず、どんどん突き進む姿はカッコ良くさえ見る。

「いま地震が来たら、ひとたまりもないよ」ぼくは姉の背中に問いかけた。

——だいじょうぶ。しばらくは来ないわ。何も感じな

いし、鳥たちも騒いでいない。

ぼくは感心した。動物の直感はあるなとれない。

太陽の位置から見てお昼にはもう少しという頃、巨大な樹木の根元に出た。姉は確かめるように仰ぎ見ていたが、ぼくの方を振り返った。

——ここよ。

姉は根の一本に足をかけるとススツと上っていった。ぼくも遅れじとよじ登る。木登りの経験なんかない僕がいつも簡単に。猿人の体つてうまくできてるんだなあ。

姉は手をかざして辺りを見渡し、目的のものを発見したようだ。

——ほら、あそこ。

指す方を見ると、ひととき大きな地割れの痕があった。かなり古いものらしく、植物の茂りかたが半端じゃない。姉はピョーンと隣の木に飛び移り、地割れへと降りていった。ぼくも続く。

近づくにしたがって、地割れの巨大さに圧倒された。怪物の口に飲み込まれるような錯覚をおぼえた。姉はその中へ入っていく。

割れ目の奥は斜めに延びていた。まるで地下トンネルだ。ぼくたちは陽が届くギリギリのところまで進んだ。そして足を止めた。

行き止まりになってる。トンネルはここでおしまいだった。落盤……というのだろうか、天井が崩れ落ちたんだ。それもずいぶん前に。

立ちふさがる岩の表面を手でなでていると、足先にコツンと当たったものがあつた。なにげなくそれを手にしてみた。うわわわわ。ガイコツ！

ドクロ！　しゃれこうべ！　頭の骨だ！

うわうわうわ。ぽつかりと空いた眼とにらめっこしてしまったんだからたまらない。頭蓋骨を放り出したぼくは意味もなく手を振っていた。

そのとき、ようやく気がついた。白骨化した猿人の死骸があちこちにあるのだ。みな落石の下敷きになっている。死骸に残るベージュの毛が、わずかな風にそよいでいた。

8

見渡しただけでも、十体以上の死骸があるだろう。みな、岩に押し潰されたり身体の一部をはさまれたりしてそのまま息絶えたようだ。岩の下にはさらにこの何倍もの猿人がいることだろう。

背中を刺す太陽光線が熱い。なのに体の震えがとまらない。こんなにたくさん死骸を見たのはもちろん初め

てだ。ぼくはさすがの思いで姉の方を見た。姉は少し離れて、岩の前にかがみこんでいる。ぼくが近寄っていくと彼女は身体を引いて一体の白骨を示した。

——母よ。

え？ 母親ならちゃんと生きてるじゃないか。

——あれは新しい母親。これがあなたとわたしの本当の母なの。

ぼくは吸い寄せられるようにひざまずき、怖々ながら白骨を観察した。もはや男女の区別もわからない。わずかに残る長い毛が女性を連想させるというのはあまりに現代風の考え方だろうか。

「ここで何があったの？」

姉はしばらく母の頭蓋骨をなでていたが、やがて何かを決心したように腰を上げ、そばの平たい岩にぼくを誘った。それはベンチのような岩だった。もしかすると、姉はよくここにひとり来ては、この岩に腰掛け、在りし日の母を偲しのんでいたのかもしれない。

仲良く並んで座ったぼくに姉が手を伸ばしてきた。その手がぼくの左手に重なったとたん、まるで雷に打たれたように体中を電流が駆け抜けた。

と同時に、あふれんばかりの映像が頭の中に流れ込んできた。ぼくは息を飲んだ。

森林が見える。その向こうは曇り空だ。ところどころ赤く輝いているのは何だろう。肌に心地よい風を感じる。風はほの甘い香りを含んでいて、その中に身を沈めたい気持ちにさせられる。

映像は森林のアップになった。大勢のベージュ族がいる。彼らはめいめい地面に落ちた木の実を拾ったり、木の枝につかまりながら、もぎ取った実を直接口に入れたりしている。目を転じると、子供にお乳をやっている母親たちがいる。とても平和な光景に思えた。いやじっさい平和なんだ。

ここにはサイやトラのような猛獣はいない。

頭上に広がる雲の一端がスーッと動いた。青空がのぞけるかと待っていると、代わりにゴツゴツした岩肌が見えた。かなり距離があるが間違いようがない。空一面が岩肌に覆おおわれているんだ。

——ここは、地底世界なの。

姉の思いは、強烈な懐かしさを伴ともなっていた。

9

——そう、ここはわたしたちの生まれ故郷。

まるでSFのような話だ。でも映像は疑いをはさめな
いほど臨場感に満ちている。以前観た映画に地底の世界

を扱ったものがあつたけど、翼竜よくりゆうや首長竜くびながりゆうなどが我がものの顔でのし歩いていた。今見せられてる世界にはそのたぐいの恐竜はいないようだけど、今のところ。

目線が地上に戻った。映像は再び、乳飲み子を抱く母親をズームアップした。

——これが母。そしてあなた。

抱かれておいしそうにお乳を飲んでるのがぼくかあ。照れくさいぞ。そばで木の実をかじってる小さな子が姉らしい。かわいい。

後ろに見える小高い山には、いくつも洞穴の家があり、集落を成している。こんな集落は他にもいくつかあるらしい。ここのボスは父だという。

場面は変わった。真つ赤な河が流れている。溶岩だ。グツグツと煮えたぎり、熱や光を発している。なるほど、これが地底世界では“太陽”の役割を果たしているのか。だから植物たちはよく見ると葉を地面に向けている。地熱が恵みになっているらしい。

植物の中にひとときわ異彩を放つものがあつた。花だ。花びらが紫の水玉模様。といっても指先で摘めるような愛らしい代物じゃない。ガリバーなら可能かもしれないけど、それほど巨大な花なのだ。しかしなんていい香りだ。最初に感じた“ほの甘い香り”の正体はこれだった

んだ。

——この花はとてもおいしい蜜を持ってるの。

あんまりおいしいものだから、近づく二度と離れられなくなるんですって。なめたいときは、ボスの許しで、特に鼻の利かない仲間が代表で汲みにいくの。溶岩で温めた水で割って飲むと、うっとりするような味なのよ。

本物の水の流れる川が見えた。父や男たちが魚を獲っている。川べりでは家族らがそれを見守っている。争いのない平和な世界……。

——この温和な地底でわたしたちは昔から生活をくり返してきたの。ところが——。

地底世界もふだんから地震とは無縁じゃなかった。ときおり起きる地殻の揺さぶりに溶岩があふれ出し、命を落とす仲間がいた。天井からの落石による被害も珍しくなかった。それらは仕方のない天変地異であり、猿人たちにとって、たまの天災も含めてここは住み良い場所なのだった。

しかし楽園は永遠じゃなかった。

10

天井から剥^はがれ落ちた岩が大写しになった。スロー

モーションのように落ちてくる。TVで見た、南極の氷壁が崩れるのに似ている。それぐらいスケールが大きいことに気づいたのは落下地点の山に激突したときだ。その山にもひとつの集落があったはずなのに……。

別の落石は森林をなぎ倒した。溶岩流の上に落ちた岩は、溶岩をはじき飛ばして火事を発生させた。ズシンズシンという音が絶え間なく聞こえてくる。まるで巨人が暴れ回っているかのように。

この時の地震は圧倒的だった。平和だった地底世界は、地獄と化した。

——それでも親たちは生き延びようと、岩壁を登り始めたの。

猿人たちは経験で、日頃から落石の少ない場所を知っていた。彼らはそこを目指して避難し始めた。しかしそこは猿人たちにとって、悪い意味で踏み入ってはいけない場所だったのだ。なぜなら地底世界が唯一、地上とつながっている場所だったから。誰も越えてはいけない、入れてもいけない場所だったから……。

姉を背負った父は、赤子のぼくを抱えた母の手を引きながら、大勢の仲間たちを率いて禁断の場所へと岸壁をよじ登っていった。その道中の映像は見るに堪^たえなかった。足を踏み外して悲鳴とともに落ちていく者が続出した。母も何度か足を踏み外した。そのたびにぼくを抱く

腕がギュツと締まっつて痛かった。

そこへたどり着いたとき、仲間の数は三分の一に減っていた。誰もがぐたくたに疲れていた。

ほとんどの猿人たちは初めて見たんだろう、不思議そうに頭上を仰いでいる。あの上に本当に救いがあるんだろうかと。かすかに顔をなぶる風が吹き込んでくる。

出口がどうなっているか調べるため、父は仲間の一匹を連れて登っていった。ブラウン族との戦いの後、父を連れ帰ってくれたあの大猿いや大男だ。彼は父の片腕なのだ。この頃はまだまだかなり若い。やがて戻ってきたふたりは行くぞというジェスチャーをした。地震はしばらく止んでいた。今がチャンスだ。

黙々と登り続ける猿人たち。傾斜はやや緩ゆるくなったが、疲れのためか数人の仲間が転げ落ちていった。誰も振り返る余裕はない。ただひたすら上へ上へと進んでいく。

明かりが見えた。ついに地上に到着したんだ。誰もが声を上げた。しかしそれを待っていたように、大地が激しく身震いした。

——あと少しだったの。地底とはちがう乾いた空気に惹ひかれて、みんな一步一步踏みしめながら登っていった

わ。その時ぐらりと揺れて地滑りが起こったの。それでもみんな必死で登った。なのに最後の最後で頭上の大きな岩が落ちてきた…。

姉の手の平がぼくから離れた。映像はそこで終わった。そうだったのか。目の前にある巨大な岩がみんなの上に落ちてきたんだ。と同時に地底世界への穴をふさぐ役割を果たすことになった。猿人のぼくが、物心のつく前の物語だった。

立ち上がった姉につられ、ぼくも腰を上げた。最後に、母の遺骸に心を込めた視線を送って。

「どうして今日ぼくに話してくれたの？」ぼくはたずねずにはいられなかった。

——あなたが急に大人になった気がするから。

帰り道、ぼくたちは木の実をかじりながら、しんみりと歩いた。姉からはもうどんな言葉も聞こえてこなかった。

家が近づくと、騒々しい声が聞こえてきた。峠を登り切ったとき、眼下に見えたのは、ものすごい数の猿人だった。全部ブラウン族だ。帰ってくる道を間違えたのか？ と一瞬思った。

姉は何か叫ぶや、ブラウン族でいっぱいの中にまっすぐ駆け下りていった。ぼくもあわててそちらを見ると、

ベージュ族が攻撃されていることによく気がついた。そうか、ブラウン族の奴ら、今度は数を頼りに攻撃を仕掛けてきたんだ。にしてもすごい数だ。奴らが小学校の朝礼で校庭に並んだ全校児童だとすると、ベージュ族は先生ぐらいしかない……。そんなバカな例えをしてる場合じゃない。このままじゃベージュ族は全滅だ。

ぼくも姉の後を急いで追った。駆けながら使えそうな木ぎれはないかと探したが見当たらない。ええい、今日はカンフーで勝負だ！

両陣営が取っ組み合いをしてると真ん中に走り込み、さて相手を、と振り向きざま、横つ面を思いつきり殴られた。そうだった。奴らは野生の動物なんだ。しかもベージュ族と違ってケンカ慣れしてる。頬をさすりながら見れば、ベージュ族は完全に押されモードだ。

そのとき、高く力強い声がした。大男さんだ。反対側の丘を何か抱えながら降りてくる。木ぎれだ。それも何本も。彼は仲間にこれで戦えと渡していく。ブラウン族は浮き足立った。大男さんと眼が合ったとき、彼はぼくにウインクしたような気がした。